二〇一〇年一一月二四日（京都渉成園 参加者一七名）

水に還る他なし蓮の枯れ伏して　うつぎ
もくれんの光をまとふ冬芽かな　〃
着物美人まどろむ京の暖房車　〃
橋渡る間もしきりなる散紅葉　〃
数珠を編む指に見とれる路地小春　〃
どこに立つもカメラの邪魔や紅葉寺　〃
鯉躍如映る紅葉を揺るがせて　ひかり
旗に付く善男善女報恩講　〃
日の揺らぎ障子に映へて池畔亭　〃
黄落の大路参拝バスしきり　〃
スニーカー嵩の落葉をけ散らせて　きづな
池畔亭ひたと閉じたる白障子　〃
茶室へと茶の花垣の続きけり　〃
山門の左右の遅速や黄落す　〃
名園に座して満目冬紅葉　わかば
抽ん出て苑を統べをる大枯木　〃
後足宙にもがきて鴨潜る　有香
ビロードのごともくれんの太芽　かな〃
天皇のお休み跡や色鳥来　百合
槍折れし如くに蓮の枯れにけり　〃
矍鑠とせる枯蓮もありにけり　せいじ
黄葉して苑睥睨す大銀杏　〃
風吹けばかそけき音や枯蓮　はく子
堂に満つ信徒千人報恩講　〃
小春日や一期一会の園めぐる　あさ子
天を突く銀杏黄葉の眩しけり　宏虎
火のごとく燃ゆる一隅櫨紅葉ぽ　んこ
枯蓮直立不動武者のごと　百姓
散紅葉五彩に敷きし水の底　明日香
枯蓮の影のゆらぎや水鏡　よし子
御堂千畳門徒にあふれ親鸞忌　菜々
折れずして直立したる枯蓮　満天
参拝の数多のバスに銀杏散る　〃
小流に色をとどめし散紅葉　〃
山門のうちそとに散る大銀杏　〃

吟行句会みのる選

二〇一〇年一一月二四日（京都渉成園 参加者一七名）